

ライフラインから展開 ～50年後、100年後も



京都市長 門川 大作

明けましておめでとうございます。

新年を迎え、皆様の御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。

はじめに

「千年の都」として発展してきた京都は、四季折々の美しい自然や、寺院・神社・京町家などが織り成す趣深いまち並み、長い歴史の中で磨き上げられてきた伝統文化が息づき、多くの方々に愛されてきました。世界で最も影響力を持つ旅行雑誌の一つ「トラベル・アンド・レジャー」誌の読者投票では、6年連続でベスト10にランクインするなど、世界からも高い評価を頂いています。

平成28年3月、そんな京都に文化庁が全面的に移転することが決定しました。日本文化のふるさと・京都に文化行政の中枢を置き、文化の

力で日本を元気にしようという政府の御英断。平成33年度中の移転に向け、本市に設置された「文化庁地域文化創生本部」において、現在、オール京都・オール関西で準備が進められています。

京都の未来を切り拓いた琵琶湖疏水 ～明治150年・京都の奇跡プロジェクト～

本年は、明治元年（1868年）から起算してちょうど150年に当たります。大政奉還の翌年、我が国は明治に改元し、近代国家への歩みを踏み出しました。しかし、これは京都にとって困難な時代の幕開けでもあったのです。

都の地位を失い、人口が3分の2に激減するなど、都市存亡の危機にあった当時の京都。そんな中で先人たちは、未来を見据えて行動を起こし、琵琶湖疏水やその水を利用した日本初の事業用水力発電所「蹴上発電所」の建設、さらには市電の開業など、先進的な取組に次々と挑戦しました。

琵琶湖疏水は、琵琶湖から京都へ水を引くための大規模な水路です。建設当時には、水車を使用した機械工業、舟運、かんがい、文化財の防火用水など、様々な用途に利用されました。そして、今なお本市の水道水の原水はほぼ全てこの疏水の水であり、ここから京都に命の水が送

する文化・経済の発展

光りかがやく京都へ～

られ続けています。

大きな危機の中、ピンチをチャンスに変え、未来の礎を築いた京都の先人たち。本市では、本年、その歩みに学び未来に生かす「明治150年・京都の奇跡プロジェクト」を市民の皆様と共に進めてまいります。

また、本年3月には、「琵琶湖疏水通船」が本格復活します。昭和26年に舟運が途絶えて以来、運行されていなかった通船の再開。春には咲き誇る桜を、秋には美しく染まる紅葉を船上から楽しみながら、明治の先人たちの知恵と努力を肌で感じられるこの事業を通じて、「京都の奇跡」を多くの皆様にも実感していただきたく存じます。

上下水道局次期経営ビジョンの策定

本市では、平成20年度からの10箇年の経営戦略である「京（みやこ）の水ビジョン」に基づき、様々な事業を展開していますが、現在、このビジョンの最終年度を迎えています。本年はこれを着実に達成するとともに、平成30年度から10箇年の未来像を描く新たな経営戦略を策定する重要な年でもあります。市民の皆様暮らしを支える水道・公共下水道事業を、未来へと確実に受け継いでいかなければなりません。

これまで減少傾向が続いていた水需要は、観

光の活況によるホテルやレストランの使用水量の増加などもあり、昨年、6年ぶりに微増に転じました。しかしながら、ピーク時の水量との比較では、水道が22%の減、下水道が18%の減となっており、厳しい経営環境に変わりはありません。

次期経営ビジョンでは、水需要の減少や災害対策などの課題に果敢に挑戦するべく、重点施策として、経営のスリム化や組織・施設規模の適正化による財政基盤の強化、老朽化した水道管更新のスピードアップ、雨に強いまちづくりを推進するための雨水幹線の整備などに取り組んでいきます。

市民の皆様にとっては、蛇口から安全安心な水道水が流れ、トイレやお風呂などの水が下水道できれいに処理されるのが当たり前。この「当たり前の暮らし」を支えるべく、今後も全力を尽くしてまいります。

おわりに

少子高齢化が進展し、人口減少社会を迎えた我が国。今こそ、150年前に将来を見据えたインフラ整備で文化・経済を発展させ、今日の京都の礎を築いた先人たちの歩みを見つめ直し、更なる未来へと繋いでいく。新年に当たり、決意を新たにしています。